

新 2025 年最初の月を振り返って

新 2025 年も、早くも 1 か月が過ぎましたが、如何お過ごしでしたでしょうか。私は自分のお正月レポートをシリーズ建てにして投稿しようかと思っています。「そんな考え方おかしいよ」と思われるところが「ありましたら、どうぞお気軽に「マイお正月レポート」をお寄せください。」

(Part1) 私たちは年賀状卒業世代だったのか

年賀状も「断捨離」の的とすべきなのか

私は PC とプリンターとスマホのダウンや不具合に祟られて大変な年末年始を過ごしました。一時よりも数量は大きく減りましたが今年も 450 枚近くの年賀はがきをお送りしたのですが、例年年末までに完了していた送付が年を越して 3 が日過ぎになってしまいました。これと同時に、毎年お出ししている年始メール「湘南海岸からの新年のご挨拶」も今年はお送りできずにおわってしまいました。一方、頂くお年賀状にも「本年をもって年賀状の交換は止めにしました」という文言が急激に過ぎる増え、「こりゃ、私にとっても年賀状送付中止の潮時なのかな」と思ったりもしました。「断」(新たに手に入りそうな不要なものを断る)、「捨」(家にずっとある不要な物を捨てる)と、「離」(物への執着から離れる)からなる「断捨離」が年賀状についても私たちの行動指針になるものなのかと思えて。

「去る者は日々に疎し」では寂しすぎる

しかし、年賀状をいただく一方で、電話やメールでのご挨拶を相次いで受けて、「やっぱり、年賀状送信は続けていかなくちゃ」と思なおすに至りました。例えば、年賀状をお送りしたのをきっかけに、小田高 11 期同期生の久野厚夫兄(2 組)からもお電話があり久しぶりに談笑の一時を持ちました。ぺんてる社にお務めで TQC(全社品質管理)活動で実績を上げておられた久野兄を師と仰ぎ、私が勤務していた東芝電材に導入するきっかけを与えてもらった当時の頃の話など語り合っているうちに、現在もなお日々を明るく元気に過ごそうとしている我が身にとっては大きな励ましを受けたように思えます。「去る者は日々に疎し(Out of sight, out of mind.)」なんて言われますが、年々の私からの年賀状が格好の sight の役割を果たして、昔の mind の交流を思い出す縁になっていたようです。もともと木版画年賀状の作成と送付を自分の趣味としていた私ですし、断捨離が大の苦手でもありますので、先方様からの受信が得られなくなった場合でも、年賀状送付を趣味として続け、当方の mind(記憶、思い出など)をお伝えし続けていこうと思ったわけです。

やはりうれしい年一回のコミュニケーションの機会

およそ 50 年も前に、東芝商事仙台支店に勤務していた時にお付き合いいただいた盛岡在の松本博さんさんからも早速お電話がかかってきました。1974 年の厳冬機に、生まれたばかりの長女愛子を背負って仙台市から出かけた私たち夫婦を、家族ぐるみでワンコソバの「直利庵」に案内してくださった松本ファミリーも、奥方はなくなりお子さんたちもみな独り立ちして寂しい限りだとか。しかし、お声だけは元気で明るかったので、「もうこの年になったら、自分でできるだけ明るく元気に日々を過ごすようにしていかなくちゃね。」とマイ年賀状に刷り込んだ「当年にとって 84 歳。寄る年波に逆らって、精一杯元気で明るく暮らしていきたいと思います。」という一節を復唱するような形で述べて、お互いに今年も健勝でいこうと誓い合いました。

直接の勇気づけのメールまでいただいて

更に、私が年賀状で白内障手術の、話を触れたところ、東芝 38 年入社でアバウトな連中ばかり集まった About 38 グループの一人の杉岡修二兄から、関係情報を収集していたのでしょうか、白内障手術経験者 4 名のレポートがメールで送られてきました。早速目を走らせて私が無用に心配していたところを払拭できたお陰で、私は安心して 1 月中に右目(1 月 15 日)と左目(1 月 29 日)のに手術を受けることができました。暫くの間または長い間 out of sight であったとしても、あちらにもこちらにも違った環境で似たような経験をした仲間がいて、共有できる mind(関心や興味)を持ち合わせていて、必要に応じて関連情報を交換し合えるのだという極めて実利的なメリットもあるのだということを思い知らせてくれました。

ともに懐かしく思い起こせる幸せも

そんな中に、いわき在住時代に「いわきニュータウンテニス倶楽部」で一緒していて、その後仙台市に転居された相川淑子からの年賀状の中に昔を懐かしむ1節があり、そこに「4843」を思い出します」という表現がありました。「あれえ、4843 ってなんだっけ？」と疑問を發した私に「いわき時代に私が乗っていた軽自動車のナンバーじゃなかったかしら」と、いわき生まれの女房殿が答えてくれました。そうそう、忍び寄るシワ(皺:48)とシワ(染み:43)の波を笑い飛ばしてやろうと思って發した駄洒落まがいの表現まで覚えてくださったのだととても懐かしく嬉しく思えました。同クラブの吉田寿保さんや江井由美さんからいただいたお年賀状にも当時を懐かしむメッセージが記されていました。ともに当時をとともに懐かしく思い起こせるのも本当に幸せなことだと思います。

コミュニケーションを楽しむ人と義務感をもって臨む人と

改めて考えてみれば、私たちはみな、様々な環境で出あった先輩や同僚の皆さんから育ったからこそ、現在の自分があるのだらうと思います。自分史を紡ぎあってくださった先輩や同僚の皆さんに対して、感謝の念を込めて昔を思い出し、そしてお互いの一層の健勝について励ましあうことができるのは幸せなことなのだらうと思います。私の場合も、「年賀」(新年を祝う挨拶)の意味はことさらなく、「1 年に 1 回のコミュニケーション」を楽しんできたように思えます。ことによると、「本年をもって年賀状の交換は止めにしました」と認められた皆さんは、年賀状に“楽しみ”は感じられず、ひたすら“社交場の義務”ととらえて年賀状發送に取り組まれてきたのだと思います。恐らく「年賀状は虚礼なり」という議論にも賛同されていたに違いありません。

ようやく小田高 11 期会解散の謎が解けた

このように考えてみた時に、ようやく私にとっての大きな謎が解けたとけたような気がしました。私は「会員 2 名になるまで続けよう」と思いながら小田高 11 期会の常任幹事を楽しみながら務めさせていただいていました。常任幹事とはいっても特別な権限はないのですが、幹事の手違いで割高料金を設定してしまったために生まれた剰余金だけは、可及的多数の 11 期会メンバーに還元すべく保持することとして、「使用する場合は両常任幹事の同意を要し使用実績は次回の学年幹事会で報告すること」という規約を設けていました。ですから、「小田高 11 期会の“個”展」開催のために並々ならぬ努力をしてくださった故市川陸雄兄(6 組)に対して、筋を通して 11 期会として感謝の意を表す機会を設けていたのですが、これが無視された時には大きな憤りと失望感を感じました。私はそのまま常任幹事の座を降りることになったのですが、小田高 11 期会活動を経るたびに意気が上がってきたクラス幹事も健在でしたので「小田高 11 期会は会員 2 名になるまで続く」ものと確信していました。ところがなんとまさかの解散だとのこと。私が去った後の学年幹事会でどのような議論があったのか知りませんが、“意気が上がってきた”と見ていた

クラス幹事諸兄姉、実は小田高11期会運営の“義務感に苛まれていた”だけだったのか！ようやく我が意に反した小田高11期会解散劇の謎が解けてきたのですがメンバー各位はどのように感じなのでしょうか。

(Part2) 白内障手術を受けてみて

“そのうちにする”っていうことは“やらない”ってことになる」と諭されて

ITトラブルによる年賀状騒動について私のお正月ライフに重きをなしたのは白内障手術的一幕でした。もとはと言えば、昨年末オーストラリアから一時帰国してきた長女が私に対してかけた「お父さん目と耳はどうしてるの」という一言でした。私が「そのうちに何とかするさ」と答えたところ「“そのうちにする”っていうことは“絶対にやらない”ってことになるんだよ」というご託宣。「確かにその通りだな」と感心していると、今度は、自らインターネットで病院を検索し、そのええ予約まで取ってくれたのです。「この娘の親の顔を見てみたい」と妙な感心をしているうちに、まずは“目”立たぬ方の補聴器購入を昨年中にし遂げておいたのです。

白内障による転倒事故増加中

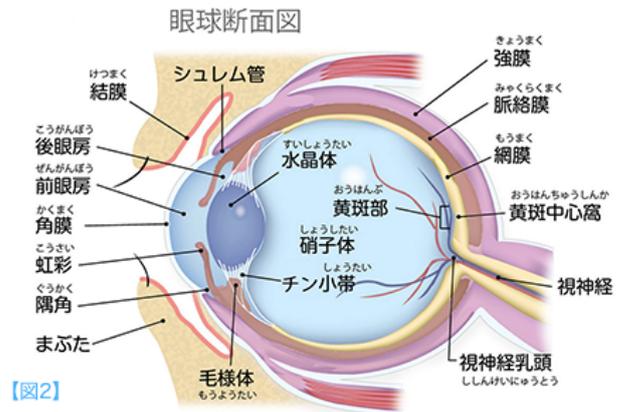
実は、耳より目の白内障手術の方が自分の気になっているところでした。20年ほど前に「いつ手術してもおかしくない状態」と診断されていたからです。それが近年、中澤秀夫兄、水口幸治兄、山本哲照兄(いずれも7組)の友人3人で山中湖でのワカサギ釣りの現場に及んで、針の先が見えなくなくなって、いつもの天ぷらだね仕入れ一番頭役を務められなくなって「白内障を何とかしなくちゃ」という気持ちに傾いてきたのです。そして昨年、神奈川県最古のアマチュア劇団と言われる「劇団こゆるぎ座」の公演を見に小田原三の丸ホールに出かけた時に転倒事故を起こした際に「いよいよ白内障手術決行の時か」と内心では思い詰めていたのが事実です。歩道から車道を横切る際に段差に、見分けがつかないほど視力が衰えていることを思い知らされたからです。白内障による転倒事故増加中です。転倒しやすくなったと思われたら是非眼科医の戸を叩いてみてください。

ついでながら「こゆるぎ座」関連の情報を以下の通りお伝えします。

小田原の市民劇団「こゆるぎ座」が、2月22日(土)・23日(日)、小田原三の丸ホールにて80周年記念公演を行います。公演の演目は「小田原大手前 終戦物語」。代表の関口秀夫さん(86)は小田高の先輩で、妹さんが城山中学卒同級生で新小田原高校生(城内高校卒業生)の(旧姓)関口幸子さんです。公演は大ホールで22日・午後5時開演、23日・午後1時30分開演。チケット(全席自由)1500円で、同ホール窓口、ハルネ小田原街かど案内所、平井書店で販売中とのこにと。常連の観客層に交じって小田原の秘宝「こゆるぎ座」の公演ぶりをご覧ください。

神の造作に手を加える白内障手術は神業に近い

改めて眼球の断面図を見てみると右の図のようになります。さすが造物主の作品だけあって、体の中の小さな部分でしかない目なのに、細かい部位を配置され、それらが協働して、水晶体から入ってきた光景を網膜の上に映し出す機能を設けられているのです。そして、「①眼球を切開して水晶体の前嚢を切り取り、②水晶体の核と皮質を超音波で砕いて吸引して取り出し、③残った後嚢の中眼内レンズを挿入する」という手立てをとるのですから、白内障手術はまさに神業と言ってもいい程ですね。



【図2】

意を決して眼科医の門をたたく

そんな神業に近い手術なのに、このホームページ「小田原高等学校第11期(Web11)」の編集長である今道周雄兄(4組)などは「僕は1日で両目とも手術しちゃったよ」と剛毅に言い放つ人がいます。しかし、元来臆病者の私には、「手術または手術後の手当ての不備のお陰で失明した」といった白内障手術経験者の談が気になります。そのうえ、私の場合は妙なことに、「幼い時に私を残して逝った両親が与えてくれた生身の水晶体を人工レンズに置き換えることを造物主はお許しになるのだろうか」と、ちょっぴり宗教人っぽい怯えを感じていました。しかし、「目の機能回復によって余生を元気に明るく過ごせてこそ幸福の至り」と思い切って医師の執刀にゆだねたのでした。さて、長女が選んでくれたのが、辻堂北口の「湘南C-X(シークロス)」地域のLuz(ラズ)湘南辻堂ビル5階にある辻堂神台眼科。なにより、院長の井田泰嗣先生がホームページに載せておられる「目の手術治療は、不安を感じる方が多いと思いますが、手術前の不安をできる限り少なくする笑気麻酔を導入して日帰り手術を行っております。」という一節に心惹かれました。

耳と目の治療費の違いを痛感

手術当日の夕刻に井田先生から直接お電話をいただき手術後の様子を聴いていただけたのも嬉しいことでした。ともかく難症例を含めて1万件以上の手術執刀の経験をお持ちでありながら、慎重にも慎重を期して1件のミスも起こされないよう努力されている姿を見て私は井田先生のファンになってしまいました。実際に、右目の手術(1月15日)と左目の手術(1月29日)の前後に合計12回ほど通院して診察を受けたり、手術のための準備事項や手術後のケアについての指導を受けたりする機会がありました。病院通いは2月になっても続いており、昨日(2月3日)も診断を得て両眼手術後視力が回復し、運転免許証更新テストの際に裸眼で臨んでも大丈夫という診断を得て喜んで帰ってきたところです。こんなに手厚い診療を受けていながら、医療費請求を受けたのは右目の手術日の1回だけ。保険に入っている患者には特別控除の特典が与えられているようです。これに対して12月に購入した補聴器の方は左右ペアで約45万円で一切保険金援助の負担なし。耳と目との違いこそあれ、ともに高齢者が体の機能に支障をきたして日常活動の遂行に苦勞している現象であるにもかかわらず、政治家や医療官僚の耳の方には政治家の耳目には難聴に対する配慮が全く行き届いていないようです。

白内障から脱して清い眼での日々をぜひ

改めて振り返ってみますと、白内障の症状には、「目が疲れやすい／目がかすむ・霧がかかったように見える／光が眩しく感じられる／日中と夜で見え方に違いがある／視力の低下／近視の激化」があるのだそうです。人生50年の時代に生まれた私たちの眼中の水晶体は50年間以上働いてきて今や人工レン

ズによるリリースを待っているのかもしれませんが、どうぞ、上記のような症状をお感じになったら白内障手術の道を進んでみてください。また、既に白内障手術を受けられている方は、ご自分の手術体験談をWeb11 に投稿して、手術を受けることをためらっておられる同輩や後輩の背を押してあげてください。私の場合は、手術日から1週間は禁酒を強いられましたが、「酒無しでは一日も過ごせない」と思っていた自分自身にも禁酒能力がきちんと備わっていたのかと嬉しい気持ちがありました。こんなところにも手術の効能があったわけですね。目が清くなったところで、しばらく休んでいたWeb11投稿に再注力して諸兄弟との交流を楽しみにしていきたいと願っています。